

人の気持の理解過程についての理論的検討

教育心理学研究室 久 保 ゆかり

The Theoretical Examination of Understanding How an Other Person Feels

Yukari KUBO

Understanding how an other person feels involves not simply identifying the feeling, but imaging how he/she “sees” the environment. Feeling in a certain mood makes him/her “see” the environment in a certain way. We understand more deeply how a person feels by comprehending his/her peculiar, concrete way of “seeing”. In order to do this, we use our prior knowledge, especially of our own emotional experiences, stereotypical emotions, and dispositions of the target person. Inferences from those knowledge must go beyond direct implications of given information to comprehend other’s feelings in a concrete, episode-based way. Through these comprehension, we construct an other person’s “psychological world” full of episodes, weighted by his/her multifaceted purposes.

- I はじめに
- II 人の気持の理解は認知か情動か
- III 一般的な情報の理解過程のひとつとして捉えた人の気持の理解過程
 - A 気持の理解は投影と区別されるべきか
 - B 一般的な情報の理解と対応させた人の気持の理解過程
 - 1 人の気持を理解する際に使われる知識
 - 2 構成的な過程としての人の気持の理解
- IV 主体が他者像を想定する過程としての人の気持の理解
 - A 人の気持の特徴
 - B 主体が他者像を想定する
- V 要約的結論

I はじめに

人は人のなかに生まれ、そこで生活をしていく。人々と相互交渉をし、円滑な生活をするには、人は他の人々の考えや気持を理解できなければならない。

また、人と人とは互いに影響を及ぼしあい成長しあうという関係を持つことができる。そのような関係を作るためには、相手を理解することが必要である。例えば、その人が何らかの問題で考え悩んでいるならば、その人

に対して単に“困っている”というラベルを付けるばかりでなく、その人がその問題についてどのように思い悩んでいるのかを思い描くことが必要である。それによって相手の問題を共に考えることができ、励ましたりアドバイスを与えたりすることが可能となるだろう。あるいは相手の悩みを追体験することにより、自分自身の経験が豊かになることもあり得るだろう。人と人が互いに影響を与えて共に成長するためには、相手の人に“見えている”世界を理解することが必要なのである。

このような、人が社会生活をする上で必要な人の気持の理解とは、どのようなことなのか。本論文では、人の気持を理解する過程とはどのようなものなのかを考察する。

人の気持の理解については、社会的認知の領域でいくつか研究がされている（無藤、久保（1982）参照）。しかし、人の気持を理解する過程を実証的に検討した研究は極めて少ない。従って、人の気持を理解する過程について事実に裏付けられたモデルをすぐに導出することは難しいかもしれない。本論文では、人の気持の理解過程についての研究方向を示すことを目的として論をすすめる。

II 人の気持の理解は認知か情動か

人の気持を理解することは、共感することであると言われることもある。そこでまず、共感 (empathy) についての研究を参考にして、人の気持の理解とはどういう種類の過程なのかを考える。

共感研究を概観して Hoffman (1978) は、共感の捉え方には次の2つがあるとした。すなわち、他者の内面の認知として捉えるものと、他者への代理的情動反応として捉えるものである。そして Hoffman は、情動に注目し、共感とは他者への代理的情動反応によって定義されるべきだと主張した。

主体において喚起された情動は、それ自体が他者の内面を理解するための有力な手がかりとなりうる。さらに、人の気持を理解する時には主体の情動が喚起されることを示唆する研究もある (Stotland, 1969)。従って、Hoffman が、それまで取り上げられなかった情動の重要性を主張したのはもっともなことであると思われる。

しかしながら、情動のみによって共感の定義をすることは妥当であろうか。通常、共感するという時、そこには情動ばかりでなく知的な理解も含まれると考えられる。例えば、悩んでいる人に共感するということには、ただ情動が喚起されるだけでなく、その人の抱えている問題がわかることが含まれるだろう。従って、Hoffman の定義は不十分であると言わねばならない。

では、どのように共感を捉えるべきか。筆者は、共感を情動過程と認知過程とが分かち難くからみあったものと捉える。人は特定の感情状態にある時、特定の見え方でまわりが見えているはずである。より深い共感とは、他者に“見えている”世界を再現することである。他者の世界を再現するためには、他者を取りまく客観的な状況を知ったり、自らの情動を動かされたりしながら、特定の目的や感情を持った他者はその状況をどのように価値づけ、認識するのかを想像することが必要である。人は喚起された自らの情動を手がかりとしつつ、情動に影響された他者の状況認識を想像するのである。そのような想像は情動のからんだ認識であると言えよう。

本論文では、情動のからんだ認識として人の気持の理解を捉え、それを検討することにする。

III 一般的な情報の理解過程のひとつとして 捉えた人の気持の理解過程

ここでは、まず人の気持の理解を含めた社会的認知の発達研究に影響力の大きかった Chandler (1977) の主張

を取り上げ、投影と人の気持の理解とは区別すべきかどうかについて論じる。次に、人の気持の理解を捉える枠組として、一般的な情報の理解過程の理論的枠組を参考にし、そして、人の気持を理解する際に必要な知識および知識の用いられ方について検討する。

A 気持の理解は投影と区別されるべきか

Chandler (1977) は、ある状況で自分が感じる気持をそのまま他者にあてはめることを投影と呼び、それを自己中心的な思考とみなし、他者理解とは別のものであると主張した。確かに、自分の感じる気持をそのまま他者にあてはめることは、高度な他者理解とは言い難い。しかし、投影は果たして理解とは全く異質な過程なのだろうか。

巷ではよく、“苦労を経験した人ほど、他人にやさしくなれる”と言われる。これは、苦しい気持を自分で経験している人は、似た場面での他人の気持がよくわかることを示している。そこから筆者は、他者の気持をわかる道筋には、他者についての情報を起点とするものばかりではなく、自分の気持を起点とするものもあるのではないかと考える。実際に、就学前児では他者の感情に対する自分の感情を考えさせると、他者の感情の理解が促進されることが報告されている (Hughes, Tingle, & Sawin; 1981)。それは、投影は理解と異質な過程ではなく、他者理解のあり方のひとつであると捉えられることを示唆している。

このような考えをおし進めていくと、ではどのように人の気持の理解過程は説明されるのであろうか。説明を試みる際の枠組として次の考えが参考になる。すなわち、一般に情報の理解とは、与えられた情報から受け手が既存の知識を喚起し、情報を変形操作して、対象についての一貫した全体像を作ることであると言われる (佐伯; 1982)。人の気持の理解も、既存の知識に支えられていると見なすことができよう。

そこでこれから、この枠組を基にして人の気持を理解する際に使われる知識は何か、そしてそれらはどのように使われるのかについて考える。さらに、それによって投影を他者理解のあり方のひとつとして位置づけることを試みる。

B 一般的な情報の理解と対応させた、人の気持の理解過程

1. 人の気持を理解する際に使われる知識

Gnepp, Klayman, & Trabasso (1982) は他者の気持を理解するための情報源として次の3つを考えた;(1)状

況情報 (2)他者の属する集団の性向についての情報 (3)他者の性向についての情報。それにならって、他者の気持を理解するための主体の知識として、次の4種を筆者は想定する。

(a)ある状況で自分が抱く気持についての知識

(b)ある状況で人一般が通常抱く気持についての知識

(c)ある状況である特定の集団に属する人々が抱く気持についての知識

(d)ある状況である特定の個人が抱く気持についての知識

(a)~(d)の知識を想定してもよいと考えられる理由のひとつとして、Gneppら(1982)の実験結果がある。彼らは、状況情報として例えば“サラはトラにあった”というものを被験者に与えた。すると、被験者は“サラは怖いと思った”と推論できた。ここで与えられた情報自体にはサラの気持は表現されていない。被験者は、“トラにあら状況では怖いと思う”という知識をあらかじめ持っているに於てはめて気持を推論したと考えられる。Gneppらの分析では、その知識が果たして(a)自分の気持についてのものか、(b)人一般の気持についてのものかは明らかではない。しかし、人一般の気持の知識は自分の気持の知識から導出されることがあることを考えあわせると、Gneppらの結果は、他者の気持を理解する際には、(a)または(b)の知識が使われる場合があることを示唆している。

さらに Gnepp らは、他者の属する集団の性向についての情報や他者個人の性向についての情報を被験者に与えると、それぞれの情報に基いて被験者は他者の気持を推論することを見出した。これらは、(c)と(d)の知識が他者の気持を理解する際に使われることを示唆する。

(d)の特定の個人についての知識の必要性は Clark & Marshall (1981) も主張している。彼らは人々の間でスムーズに会話をするには会話の相手のモデルをつくり出せねばならないとしている。会話がスムーズになされるためには、相手の内面を理解することが必要であるので、彼らの主張は人の気持の理解にとって必要な知識についてもあてはまると考えてよいだろう。そのモデルのつくられ方について彼らは、人は様々な場面で相手の人がどのように行動したかについて個人別に記憶しておき、その人と会話をする時にはそれを取り出して、その人が何をしようか、考えようかを予想するのだと考えている。

以上のように、他者の気持を理解する際に使われる知識を整理すると、Chandlerの言う投影および投影と区別されたところの理解を、単一の理解の枠組の中の水準の

異なるものとして位置づけることができる。即ち、Chandlerの言う投影とは、自分の気持についての知識((a)の知識)を使った他者理解である。投影と区別されたところの理解とは、ある状況である特定の個人が抱く気持についての知識((d)の知識)を使った他者理解である。では次に、これらの知識はどのように用いられるのかについて、検討する。

2. 構成的な過程としての人の気持の理解

前項において、“サラはトラにあった”という情報が与えられた時に被験者は、“サラは怖いと思った”というようにサラの気持をわかったことを例にあげた。サラの気持はどのようにして出てきたのか。与えられた情報に明示されてはいない。よって、被験者が、既有的知識(“トラにあったら怖いと思う”)を使って推論したのだと考えられた。

このような推論をして情報を理解する過程を、文章理解研究においては構成的過程(constructive process)と呼んでいる。そこでは言語は、無限といってよいほど豊かなこの世界について伝えるために、骨組を提供するものとして捉えられている。よって理解すべき意味は、与えられた情報に内在しているのではなく、受け手が推論をして構成するのである(内田; 1982, Spiro; 1980)。

人の気持を理解する過程は、与えられた情報に基き前項で整理した知識を使って推論する過程であると考えられる。従って、人の気持の理解はまさしく構成的過程であると言える。

文章理解研究においては、構成的過程についての実証的な研究が進んでいる。そこでは次に示す Johnson, Bransford & Solomon (1973) のように、情報が与えられると既有的知識を用いて“決まりきった(stereotypical)事柄”を推論して、情報を理解することが主として研究されてきた。即ち、Johnsonら(1973)は次のような実験をした。

A群には、John was trying to fix the bird house. He was pounding the nail when his father came out to watch him and to help him do the work. という文章を与える。B群には、下線部分を looking for に変えた文章を与える。するとA群の方が、John was using the hammer to fix the bird house … (以下同文) という文が材料文中にあったと誤再認しやすいことが見出された。

これは、情報が与えられたら人はそこから“決まりきった事柄”(この例では、クギをたたくにはハンマーを使う)を推論して理解することを示している。

さて、前述のサラの気持の例は、“トラにあった”という情報から、気持についての知識を用いて“決まりき

た事柄”を推論して気持を理解したと解釈できる。

では、次のような複雑でややルーズな気持の理解も、“既知の知識を用いての‘決まりきった事柄’の推論”による理解として解釈できるだろうか。

久保・無藤(1982)は、小学校3年生に次のような話を聞かせた。

“マアちゃんは小学生だ。駅のそばの家に住んでいる。マアちゃんは、去年のお誕生日に小鳥をもらった。名前をピコとつけた。マアちゃんは、ピコの鳥かごを窓の近くに置いた。そしてピコの世話をよくした。ピコもマアちゃんによくなつた。ところが冬休みのある日、ピコの鳥かごが風でとばされた。そのはずみで鳥かごのふたがあいた。マアちゃんはピコをつかまえようとしたが、ピコは飛んでいってしまった。”

その後、“マアちゃんは今どんな気持か”と質問した。被験者の答は次の4タイプに分類された。

- ④あらすじの表明(例 ピコのかごがとんでいった)
- ⑤感情のラベル付け(例 悲しい)
- ⑥詳細な感情(例 泣きたいほど悲しい)
- ⑦具体的個別的な気持(例 自分の宝物がなくなっ
がっかり、いつもピコの鳥かごをながめてピコのこ
とを思い出している)

質問を取り違えたと思われる④タイプを除くと、⑤～⑦のいずれも人の気持を理解する場合に考えられそうなことである。⑤～⑦は、マアちゃんの気持が悲しいものであるという感情の方向は一致している。⑥はそれを詳しく推論し、⑦は悲しいという方向にそってさらにマアちゃんがこれからしそうな具体的な行動とその際の心理状態について想像をしている。

⑤の“悲しい”という答は、先のサラの例と同様に“ペットに逃げられた”という情報から既知の知識を用いて“決まりきった事柄”として“悲しい”を推論したものだとして解釈できる。

では、⑦はどうだろうか。“ピコは宝物である”はどのように出てきたものだろうか。材料文中に“世話をよくした”“ピコもなつた”とあるから、既知の知識から“主人公はピコをかわいがっている”ことは決まりきった事柄として推論できるかもしれない。しかし、“宝物”というのは、必ずしも決まりきった事柄として文章から導出されるものではない。これは、考える側がマアちゃんにとってのピコの存在の意味を問題にすべきだと感じ、それを重大なものであると想像することがなければ出てこないものである。“いつも鳥かごをながめてピコのことを思い出している”も、同様に決まりきった事柄ではない。これは、先の、マアちゃんにとってのピコ

の存在の意味に沿った具体像となっている。従って、これは“既知の知識を用いての‘決まりきった事柄’の推論”による理解という捉え方では説明しきれない。人の気持の理解においては、“決まりきった事柄”の推論を超えて、より個別的で具体的な行動や心理状態を構成することがあると考えられる。

Ⅳ 主体が他者像を想定する過程としての人の気持の理解

前章で人の気持の理解においては、“決まりきった事柄”以上のことを想像することがあることを示した。以下では、人が物とはどこが違うのかを検討することにより、人の気持の理解の特徴を浮彫りにする。そしてそれに基き、人の気持の理解に特徴的な過程について考察する。

A 人の気持の特徴

何がわかれば、人の気持を理解したと言えるだろうか。

第Ⅱ章で、人の気持を、ある感情を抱いている他者に見えている世界であるとした。その感情がどのように生じるかを考慮すると、人の気持とはその人が状況をその人が持っている目的や意図と照らしあわせて価値づけたものを指す、とも言えるだろう。従って、人の気持を理解するには、その人の目的や意図を知らなければならないだろう。また、人は普通目的や意図を複数持っていて、それらは階層構造をなしている。よって、人の気持を理解するには、その人の目的の構造をも知らねばならない。

しかしながら、目的や意図は普通明示されないものである。従って、与えられた情報から“決まりきった事柄”を推論するのみでは、他者の目的や意図を明らかにするのは難しいだろう。まして他者の目的の階層構造にまでは、到達できないことが多いのではないか。

そこで、人の気持を理解するにはあまり確実ではないにせよ、様々に想像をめぐらせて何とか他者の目的や意図の構造を作ろうとするのではないか。これは、主体の側の寄与が非常に大きい構成的な過程である。従来、文章理解研究では与えられた情報の、いわば要素と要素の間を埋める推論をなす過程が示されたが、人の気持の理解では主体が新たに要素を考案して全体像を想定するという過程があるのではないか。

さらに、人は物と比べて次のような特徴を持つ。すなわち、日常生活においては人一般にはなく、ひとりひとりの個人の存在に関心が向けられる。しかも、社会的場面を背景とした人の行動は通常その時、その場におい

てしか現れない一回性のものである。従って、人の理解では、特定の人間が特定の状況で具体的にどのように行動しそうかがわかることが究極的には必要である。よって、人の気持の理解では具体的な像を予想することが必要とされるのではないか。

実際に人を理解する際には、与えられた情報から推論される“決まりきった事柄”を越えて、具体的なエピソードを想定することがあることを久保(1982)は示唆している。久保は“アイスクリームをもらって悲しい顔をしているのはどうして”と4〜7才児にきいた。すると、子ども達は“おなか痛かった”とか“いじめっ子に呼び出されて食べる気がしない”などと新たな出来事を様々に考案して説明した。これらの出来事は、“アイスもらう”ことから“決まりきった事柄”として推論されるものではない。これは、幼児といえども人を理解するために非常に柔軟に新たに個別的なエピソードを考案できることを示している。

B 主体が他者像を想定する

前節で人および人の気持の特徴に基き、人の気持の理解過程について、(1)主体が他者の目的の構造を想定する、(2)他者の具体的な像をつくる、という2つの考えが導出された。以下では、実際に人の気持を理解する場面を資料として、その考えを検討する。

その資料を調べる目的は、第1に、他者の気持を理解する時に主体が他者の目的の構造を想定することがあるのかどうかを検討することである。また、もしそのような想定がなされたとして、それは果たして他者の気持のよりよい理解へとむかうものであろうか。想定は、与えられた情報からの確実な推論を越えたものであるから、与えられた情報によって吟味されることを拒んでいるように見える。事実に基づかない空想でしかないように見えるのだ。その点を検討することを、第2の目的とする。さらに、他者の具体的な像をつくることがあるのかどうかについて知見を得ることを第3の目的とする。

資料としては、武田(1962)の国語の教材解釈と授業の記録を取り上げる。教材は、北里柴三郎についての伝記的文章『けんび鏡とともに』である。武田はそこでその文章の不十分さの明確化を授業の目的としている。しかし、それは柴三郎という人間をより深く理解する試みを通じてなされている。従って、それを人を理解しようとする過程の1事例として分析することは許されるだろう。

柴三郎について与えられた情報(教材)は次のようなものである(なお、ここでは以後の議論に関連する部分

のみを原文のまま引用する)。

“けんび鏡を前にした、マンスフェルト先生の熱心な話を聞いているうちに、柴三郎の心の中では、いろいろな考えが入りみだれていた。じぶんは軍人になりたい。しかし、人類のために病氣と戦うことは、さらにりっぱな仕事ではなからうか。とうとう、柴三郎は固く決心した。ようし、医学を勉強しよう。

柴三郎は、熊本の医学校で勉強した後、東京に出て、東京大学の医学部に学んだ。卒業すると、内務省衛生局にはいったが、ここでは、にわとりのコレラきんを発見して、注目をひいた。また、長崎にコレラが発生した時には、さっそく現地に行き、病人の大便の中からコレラきんを見つけ出した。日本人として、初めてのことであった。

まもなく、柴三郎はドイツに留学することになった。ドイツには、有名な細きん学者のコッホがいる。世界で初めてコレラきんを発見した、コッホがいる。柴三郎の心はおどった。(下線は筆者による)

柴三郎は、ベルリンに着くと、コッホをたずねた。コッホは、まず、じぶんの高弟のリョフレルについて、細きん学の手ほどきを受けるように指示した。

ある日、リョフレルがコッホに言った。
「先生、日本から来た北里というのは、実にめずらしい男ですよ。おそろしい努力家です。なにかひとつ仕事を始めると、それをやりとげるまで、けっしてやめようとはしません。どんな小さなことにも熱心で、一つのぎもんも、それがわかるまで、どこまでも追求するのです。なにしろ、ベルリンに来てから半年にもなるのに、じぶんの下宿と大学の教室との間の道しか知らないという男ですから。」

この話には、コッホも目をまるくした。

「頭のほうは、どうかね。」

「頭はおどろくほどよいのです。とかく、頭のよい人には、努力家が少ないものですが、北里は、その両方を完全に備えているから、すばらしいのです。」

さて、ここで「柴三郎の心はおどった」とはどういう気持なのか。武田は、その柴三郎の気持について次のように考えたことを報告している。

“私の知っているかぎり、「世のため、人のため」につくしたといわれる人ほど、強烈な自我をもち、すさまじい執念をもって戦いぬき、生きぬいた人が多かった。…(中略)…「人類のため」の戦いは同時におのれとの戦いでもある。おのれの満足やよろこびを抜きにしていかなる仕事も成立し得ないものだ。(p. 29~30)”

“(コレラきんを発見して)輝かしい名声につつまれ

た彼は、同時に、学問追求のけわしさをだれよりも深く感じていたにちがいない。そういうときの彼の目は、進んだドイツの医学に向けられたにちがいない。その中核にそびえるコッホの巨大な姿を、彼はあおぎ見る思いで対したにちがいない。この世界的な学者のそばで、おのれの可能性をどこまでも追求してみたいというねがいで、ドイツに留学するときの柴三郎は、まさに、そうした期待と充足感に心をみだしていた。(p. 30)

武田は、柴三郎の最上位の目的として“おのれの可能性を追求すること”を考えている。それは、与えられた情報には明示されていないことである。与えられた文章からは、“人類のため”という目的が出てくるだけである。では、“可能性の追求”はどこから導出されたのか。“私の知っているかぎり…”以下の武田のことは、武田自身の知識に基いて、柴三郎の最上位の目的が想定されたことを示している。これは、他者の気持の理解において、与えられた情報を越えて他者の目的の構造を想定することができることを示唆している。

次に武田は、“柴三郎という一人の人間のイメージを鮮明にし、拡大しよう (p. 42)”とねらって、リョフレルのことばを取り上げた。そこで生徒から、“下宿と大学の教室との間の道しか知らない男なんて、すこしかわっている”“ちっともえらいと思わない”という意見が出る。柴三郎を、勉強一点ばりの男、豊かな人間味に欠けた男と捉えたのだ。それに対して武田は、材料文の“知らないという男”との表現に気がつく。“知らない男”ではなく“知らないという男”との表現は何を意味するか。それは、下宿と大学の道しか知らないということのリョフレルが“めずらしい男、おそろしい努力家”の中味を説明しようとして出したことを示している。従って、勉強一点ばりとの捉え方では不十分である。

そこでは、武田があらかじめ柴三郎を偏屈者ではない、追求者であると想定していたから、“という男”が検討に値する問題であると気付くことができたのではないか。それは、あらかじめ他者像を想定することによって、与えられた情報の中から、それまでは気付かなかった理解の手がかりを発見できることを示している。ここにあげた例では、手がかりが想定された他者像を支持するものであったと考えられるが、場合によっては想定された他者像と矛盾する手がかりを見出すこともあるだろう。その場合には、様々な可能性をさらに考えてより総合的な他者像が想定されるだろう。

武田はリョフレルのことばについて上述のような検討をした後、さらにベルリンにおける柴三郎の行動を次のように考えた。

“ベルリンに着いた柴三郎は、その日から猛烈に勉強をはじめた。尋常のがんばりようではなかった。彼の頭の中には、自分がいま取りくんでいる課題以外には何もなかった。そういう彼には、ベルリンの道は、下宿と教室を往復する以外には何の用もなかったのだ。道ばかりではない。自分がいま取りくんでいる課題を追求すること以外の何ものも、彼には無縁の存在でしかなかったのだ。(p. 48)”

ここでは、初めに想定した“追求者”という柴三郎像が、リョフレルのことばを基にして、ベルリンでの日々の行動として具体化されている。それによって、柴三郎の“追求者”という像が明確になったと云えよう。

これは、初めに想定された他者像がその後得られた情報によって矛盾なく具体化された成功例とみなせるだろう。場合によっては、その後の情報から構成される具体的行動と、初めの他者像との関連がつかないこともある。そのような場合には、さらに様々な可能性を考えて、より総合的な他者像を想定するといった修正がなされるだろう。そこから、人の気持の理解は、目的の構造といった比較的抽象的な他者像と、具体的行動の両者を各々構成し、それらの関連をつけることによって果たされるのではないかと考えられる。

まとめると、伝記的文章の解釈を資料として分析をしたところ、人の気持の理解過程につて、次のことが示唆された。第1に、他者の気持の理解においては、与えられた情報を越えて、主体が他者像を想定することがある。第2に、与えられた情報を越えて他者像を想定することによって、与えられた情報の中から理解を深めるための手がかりを発見できることがある。他者像を想定することは吟味を拒むことではない。第3に、人の気持の理解には、想定された他者像を具体化する過程があり、それによって他者像はさらに明確になる。

なお、発見された手がかりやその後の情報が、想定された他者像と矛盾する場合には、より総合的な他者像へと修正がなされると考えたが、その修正の過程の解明は、今後に残された問題である。

V 要約的結論

人の気持の理解は、情動のからむ認識である。そのような人の気持の理解の過程は次のようなものであると考察された。人の気持を理解する際には、気持についての一般的な知識や自分の気持についての知識、あるいは特定の1個人の性向についての知識が使われる。他者の気持は、それらの知識を使って推論することによって理解

される。その推論は、しばしば与えられた情報から確実に読み取れることを越えてなされる。他者の気持を理解するために、人は与えられた情報には含意されない事柄を持ち込んで、他者の具体的な像を想定するのである。

(指導教官 井上健治助教授)

文 献

- Chandler, M.J. 1977 Social cognition: A selective review of current research. In W.F. Overton & J.M. Gallagher (eds.) *Knowledge and Development* (Vol. 1), *Advances in Research and Theory*. New York: Plenum Press.
- Clark, H.H., & Marshall, C.R. 1981 Definite reference and mutual knowledge. In A.K. Joshi, B.L. Webber, & I.A. Sag (eds.) *Elements of Discourse Understanding*. Cambridge University Press.
- Gnepp, P., Klayman, J., & Trabasso, T. 1982 A hierarchy of information sources for inferring emotional reactions. *Journal of Experimental Child Psychology*, **33**, 111-123.
- Hoffman, M.L. 1978 Empathy, its development and prosocial implications. In C.B. Keasey (ed.) *Nebraska Symposium on Motivation*. University of Nebraska Press.
- Hughes, R. Jr., Tingle, B.A., & Sawin, D.B. 1981 Development of empathic understanding in children. *Child Development*, **52**, 122-128.
- Johnson, M.K., Bransford, J.D., & Solomon, S. 1973 Memory for tacit implications of sentences. *Journal of Experimental Psychology*, **98**, 203-205.
- 久保ゆかり 1982「幼児における矛盾する出来事のエピソードの構成による理解」『教育心理学研究』 p.75-79
- 久保ゆかり・無藤隆 1982「共感的理解における類似経験の果たす役割」『日本心理学会第46回大会予稿集』 p.208
- 無藤隆・久保ゆかり 1982「社会的認知」無藤隆編『ピアジェ派心理学の発展Ⅰ』国土社
- 佐伯胖 1982「“わかること”の心理学」佐伯胖編『認知心理学講座3 推論と理解』東京大学出版会
- Stotland, E. 1969 Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 4, New York: Academic Press.
- Spiro, R.J. 1980 Constructive processes in prose comprehension and recall. In R.J. Spiro, B.C. Bruce, & W. F. Brewer (eds.) *Theoretical Issues in Reading Comprehension*. Lawrence Erlbaum Associates.
- 武田常夫 1962「授業の記録『けんび鏡とともに』国語・5年」斎藤喜博編『島小の授業』麦書房
- 内田伸子 1982「文章理解と知識」佐伯胖編『認知心理学講座3 推論と理解』東京大学出版会

付記 本論文をまとめるにあたり、井上健治助教授および聖心女子大学無藤隆講師から、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。